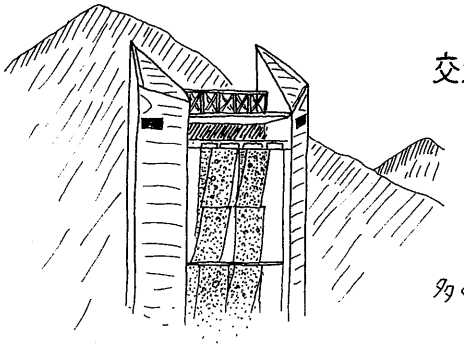
自然の日誌

はくぶつかんだより No.31 1994.12



交通事故にあった猿の子ども

（平成6年10月29日）

学童農園山びこの丘の近くの県道のすみに猿の子供が交通事故で死んでいました。棚山方面からやってくる猿は、この県道を必ず通りぬけます。ここは車の通行量が多く、猿には交通の難所で逃げ遅れた子猿が車にはねられたのです。

秋の頃「ブッポーウォール」で国体登はん競技が行なわれましたが、けがをしたり、落下した選手は一人もいません。猿も訓練しないと県道を安心して通れない世の中です。

困った野鳥相談

狩猟期間の始まる前の日「キジを保護した」といって博物館にとどけられました。

保護してやりたい思いですがキジは狩猟鳥ですから体の回復を図って放鳥しても、ハンターに見つけられ銃で撃たれてしまいます。それが心配です。

狩猟期間（毎年11月15日から2月25日まで）が終わるまでは、キジにとっておそろしい日がつづくのです。

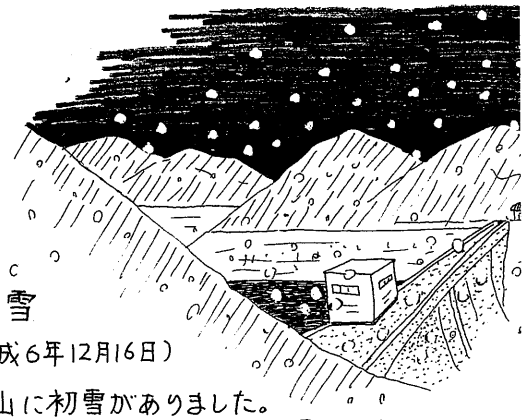
こんな野鳥相談は理想と現実の差が大きく、大変困ります。

渋柿の行方

渋柿が大豊作で重みで枝が折れそうなものばかりです。柿を取って皮をむいて、竹で作った串にさして、天日で乾燥させたものが乾柿（串柿）です。昔は軒下に柿のカーテンを張ったように柿がつるしてありましたが、現代は、放任状態で木に結実したままです。

皮肉に猿や野鳥たちには好物で大喜びです。

先祖の残してくれた特産物です。みんなの知恵を集めて特産物化を図りたいものです。



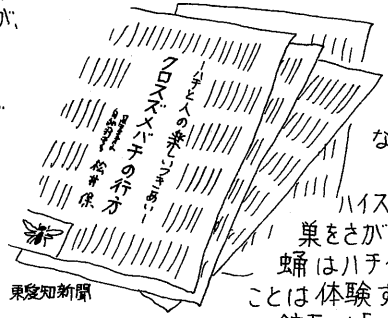
初雪

（平成6年12月16日）

鳳来寺山に初雪がありました。これで完全に紅葉は落葉して、寒い冬の季節に入っていきます。

ほんとうは雨が降って欲しかったのです。宇連ダムの貯水率も47.4%ですから、再び冬中に異常渇水があるかもしれません。東三河地方のみなさん油断しないようにしてください。

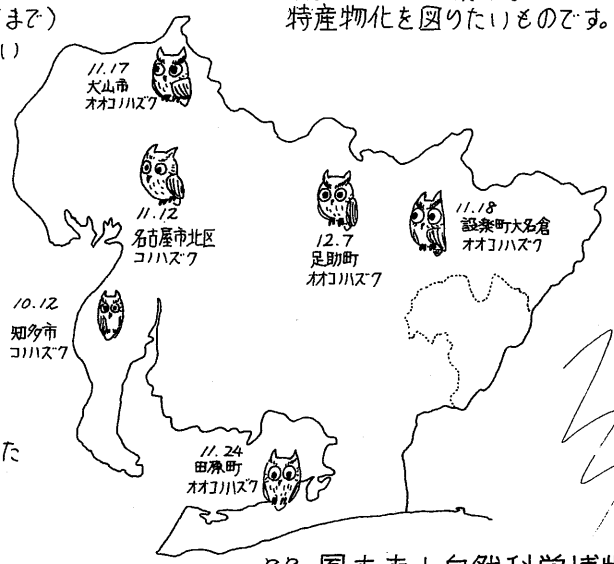
クロスズメバチ新聞



雨の少ない年は土中に巣房をつくるクロスズメバチにとっては、有利な条件となり、増殖しました。

別名をヘボとかヂバチ、ハイスガリと呼び、ハチを追って巣をさがします。巣房の中の幼虫や蛹はハチ飯に使われて大変美味なことは体験ずみと思います。

館長は「ハチと人の楽しいつき合い」の原点を探って東愛知新聞に執筆して11月11日から18日まで連載しました。このようなハチの新聞は、この地方では初めてです。



コノハズク、オオコノハズクの受難情報

こんな情報は少しも楽しいものではありません。各地で発見されたものを調べてみますと、原因は不明ですが幼鳥が多かった……。異常渇水を招いたほどの猛暑の季節で自然は厳しく、思うようにヒナを育てることができなかったと思います。この情報のおかげで大部分のものが助かりました。

カワセミの受難

（平成6年12月3日）

豊鉄食堂の窓ガラスにカワセミが激突して死んでいた…と博物館にとどけられました。

カワセミは清流の上を飛ぶ鳥ですからなぜこんなところで受難にあったのかわかりません。可愛相です。小さな鳥の霊を弔ってやりました。

春の博物館事情

長い間ほんとうにごくろうさまでした

（平成7年3月31日）

博物館の発展に功献し、長く、その運営に心血をそそいでこられた松井保館長（20年間）と、4年間にわたり鳥居植物標本（シダ類）の分類整理に尽力された加藤等次研究員のお2人が、この3月いっぱいで館をはなれることになりました。

今までのご努力と功績に深く敬意を表し心より感謝します。今後も博物館を陰に陽に支援していただけることを願ってやみません。

おつかれさまでした。ありがとうございました。

大空にもどったオオコノハズク

（平成7年4月6日）

傷ついて保護されたオオコノハズクが元気になり、動物愛護活動で有名な新城市立八名小学校（森 哲成 校長）で放鳥されました。

飛びたったのは、富山村と田原町で保護されたもので、始業式を終えた同校児童が見守るなか、松井前館長が経過説明して放鳥しました。

エサの豊富になるこれからの季節です。

たくましく、元気に自然にもどることを祈りました。

コノハズクよたっしゃでな

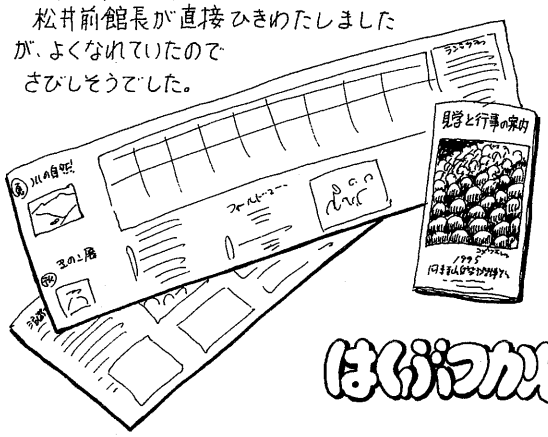
（平成7年4月3日）

平成4年10月3日、名古屋市新栄で保護され、博物館に持ち込まれたコノハズク。館長がずっとめんどうをみてきましたが、自然界に飛び立つまでには回復することができませんでした。

今回、豊橋動物園で専門の獣医さんに保護をお願いすることになりました。

豊橋動物園ではコノハズクの繁殖研究にも取り組んでおり、将来のためにも安心です。

松井前館長が直接ひきわたしましたが、よくなれていたのでさびしそうでした。



新館長誕生

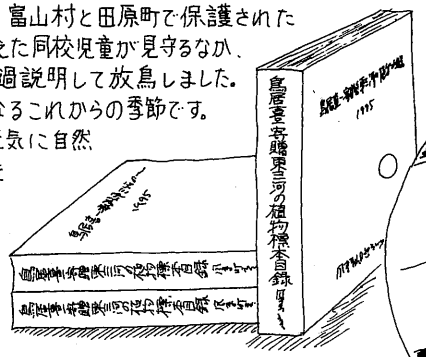
（平成7年4月1日）

鈴木仁志（ヒトシ）新館長を迎へ新しい体制での博物館の出発です。

鳳来町教育長と兼務になりますが、今後の学校休日の活用、生涯学習の場、学校教育との連けいなど地域に密着した、ひらかれた博物館づくりに、少人数ですが職員一同力をあわせてがんばりたいと思います。

「鳥居喜一寄贈東三河の植物標本目録」の完成

（平成7年3月30日）



当館学術委員であった故鳥居喜一先生が昭和初期から60余年の歳月をかけて採集した腊葉標本、約4万余点が博物館に収蔵されています。

その標本目録がついに完成しました。

この目録は牧野彦二先生（学術委員総務主任）の多大な陰の功労なしには存在しません。11年以上にわたり収蔵庫にかよわれ、黙々と分類整理あたられた結果です。ぼう大な時間と汗の結晶です。

標本の安全保管と有効活用は館の大切な使命です。

平成7年度 行事決まる

今年の年間行事が決まりました。

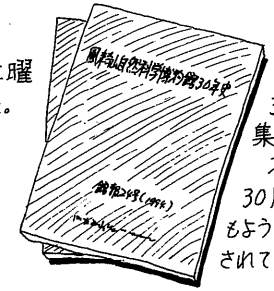
学習会はできるだけ、第2、第4土曜日、夏休みに行うよう心がけました。

また、特別展も地域性のあるものを考えています。

郷土の自然科学博物館、おおいに活用して下さい。

館報24号発行

（平成7年3月31日）



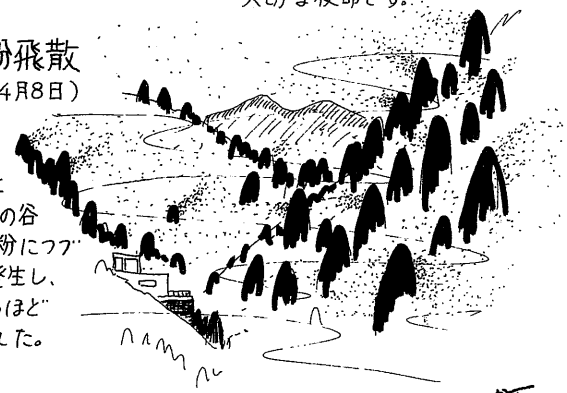
「鳳来寺山自然科学博物館30年史」として編集されています。

提言や思い出、30周年記念式典のもようなどが収録されています。

ヒノキ花粉飛散

（平成7年4月8日）

今年はスギ・ヒノキ花粉の大発生の年といわれています。門谷の谷でも3月1日のスギ花粉につづいてヒノキ花粉が大発生し、谷中が白くけむるほどでした。

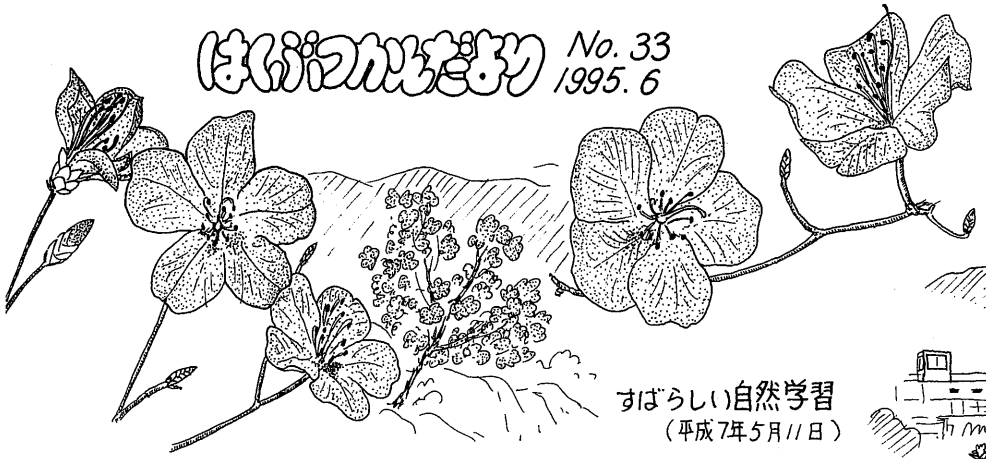


はくぶつかんだより No. 32 1995. 4

— 鳳来寺山自然科学博物館 —

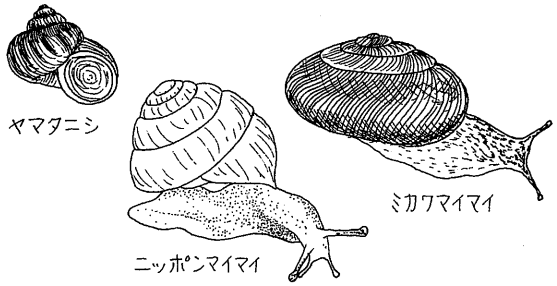
はくぶつかんだより No. 33
1995. 6

このはずくの季節



感激！ アカヤシオ満開（平成7年4月27日）

初夏の鳳来寺山をいろどる名花はホソバシャクナゲだけではありません。山頂付近の日当りのいい場所に咲く、ピンクのかれんなアカヤシオの美しさは、ことばでうまく言いあらわせません。このごく限られた時期に、そして頂まで汗してたどりついた人だけが味わえるものです。



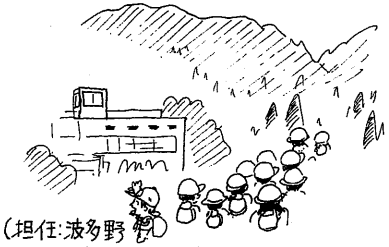
鳳来寺山の生きものを学ぶ会（平成7年5月27日）

参加64名、参道沿いに生物観察をして、中腹のモリアオガエル産卵池へ、今年も卵塊が確認できました。
午後は観察結果のまとめ．原田一夫先生によると、ヤマタニシやニッポンマイマイは近ごろ見られなくなってしまったそうです。ミカワマイマイは絶滅したのではないかといわれています。

六本杉の子孫

平成4年1月28日に伐採された六本杉の切株に実生による新たな芽ばえがたくさん出ていました。自然の生命力を感じます。
千年後には、また同じくらい立派な老杉が見られるかも…

すばらしい自然学習（平成7年5月11日）



鳳来西小6年生（担任：波多野先生）のみなさんが野外学習で博物館と鳳来寺山を訪れてくれました．始めに博物館の見学をしてから登山です。
理想的なコースだな…とうれしくなりました。
博物館員も同行し、館内と鳳来寺山を案内しました。町の施設を活用してもらい、そして郷土の自然を知る、よい機会になったと思います。

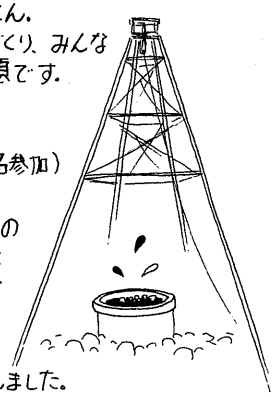
オット鳥の声を聞く会（平成7年6月17・18日）

岩手県大槌町（オオツチチョウ）の「ふるさと自然文化研究会」（会長：佐々木堅吉さん）は、平成4年から「オット鳥の声を聞く会」をおこなっています。オット鳥とは「遠野物語 五一」にでてくる鳥の名で、大槌地方では、コノハズクのことをそう呼ぶのだそうです。
勉強会の後、深夜2時頃、テントから出ると遠くかすかに声が聞こえてきました。
私には、やはり"ブッポーソー"と聞こえました。
感動的なひとときでした。翌日はコノハズクの巣箱設置（県の支援）．今後追跡調査をするそうです。
私たちにとって、とても参考になる体験でした。

鳳来寺山に放たれたコノハズク（平成7年5月20日）

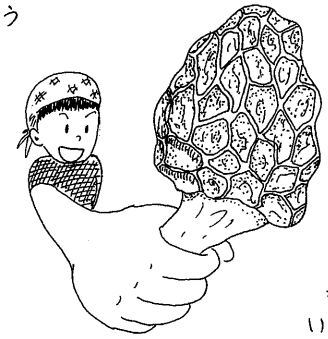
5月5日朝、七宝町安松で畑の網にかかり弱っていたコノハズクが弥富野鳥園に持ち込まれ、保護されました。このコノハズクが元気になり、ちょうど博物館に取材にみえた小島靖雄ディレクター（中京テレビズームイン朝）のはからいと、弥富野鳥園の加藤英夫所長、今村三郎さんの配慮で、鳳来寺山での放鳥が実現しました。
20日早朝、野鳥園で受けとったコノハズク（赤色型、体重60g）は、とても元気でした。
午後2時に鳳来寺山の石段入口付近で、地元の方たちの見守る中、林の中へ飛び去りました。（ズームイン朝：5月22日放送）
以後、毎晩声の確認に出掛けましたが、23日夜9時50分頃、門谷の婦人が声を聞いた他は確認できませんでした。
仲間を求めて、エサを求めて移動してしまったのか、やはり住みにくい環境なのかもしれません。
コノハズクがもどれる環境づくり、みんなで考えなければならない問題です。

地層と断層を学ぶ会（平成7年5月13日、65名参加）



静岡県掛川市付近に出かけての学習会．教科書にでてきそうなみごとな地層と断層の露頭が観察できました。
太平洋岸唯一の相良油田跡はまだ石油がわいていてびっくりしました。

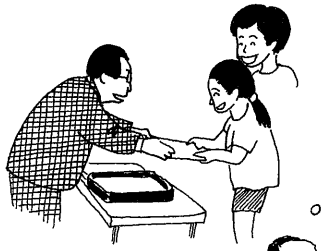
なんだ これは！（平成7年4月30日）



友の会員の竹内光くんが、門谷の県道沿いで見つけました。変な形ですがきのこです。
昨年、鳳来寺山でみつけたシャグマアミガサタケの近いなかまで、アミガサタケです。
鳳来町では初めての記録になりました
足もとで見すごしてしまいそうな、自然でも好奇心をいっぱいもっていれば、楽しい発見や、出会いがあふれています。

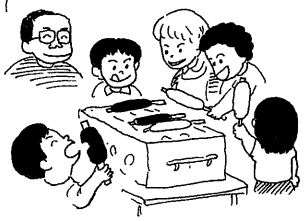
鳳来寺山自然科学博物館

あつい あつい夏でした



第1回友の会総会
（平成7年6月24日）

○懇親会（五平もち作り）



○会員表彰（精励賞）
11名

○

○友の会員役員選挙

初代会長 小椋 克好さん

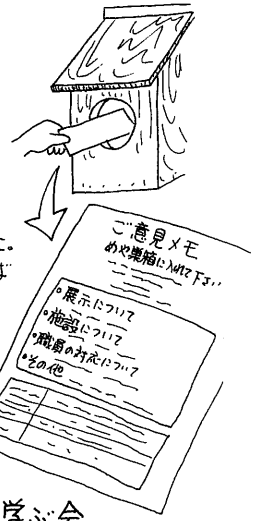
○学術委員
原田一夫
先生の
記念講演
「貝や虫に親しむ」

昭和51年に75名で鳳来寺山自然科学博物館友の会が発足して、今年でちょうど20年になります。
この記念すべき年に、ようやく、第1回の総会を開催することができました。平成6年度の会員表彰、活動・収支報告、平成7年度の活動・収支計画、会則、役員選出。そして、原田先生の講演では、先生と貝との出会いから現在にいたるまでのこと、そして子供会員へのひとつのことにとりくむことの大切さを通したメッセージ。ふだんぜったいに聞けないようなお話でした。最後に皆で五平もちを作って食べ、ほんとうに楽しい総会になりました。

夏の紅葉？

今、鳳来町のいたるところで紅葉（茶褐色の）がみられます。これは今年の夏の乾燥が原因です。特に岩場で、ごく限られた水分をたよりに生きていた植物はかわいそうでした。
昨年の猛暑には耐えられましたが、乾燥（7月23日～8月31日までほとんど降雨なし）と猛暑には耐えられず枯れるものが続出しました。

めや巣箱の設置
（平成7年7月1日）



博物館を利用するみなさんの声を今後の運営や、管理の参考にしたいと思い、ロビーと展望室に巣箱を掛けました。
施設や展示も古くなり、改善しなければならない時期を迎えています。
来館した人に、来てよかった、また来たい、友だちにも教えてあげよう…といわれる博物館にしていかなければなりません。

夏の特別展
（平成7年7月20日～8月31日）

郷土を流れる清流、豊川を中心に地学、植物、動物の立場から川の自然について展示しました。新聞（中日）でも紹介され、多くの方（5,540人）が見学におとずれました。
段戸山の源流から、三河湾に注ぐ河口までの地形のなりたち、水や石のはたらき、そこに生きる特徴的な動物、植物を標本や写真を使っての展示です。夏休みの自由研究に役立っているようでした。

夏の植物を学ぶ会
（平成7年7月8日、50名参加）

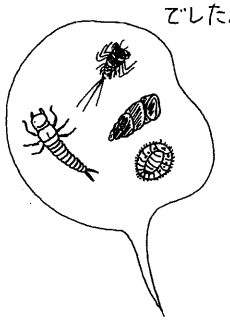
マヤラン
（ラン科）

2月の冬の自然探検で歩いたコースを歩いてみました。冬とはまったく様子が異なり、植物も生き生きしています。
雨の中の観察会でしたが、ゆっくり時間をかけて見ることができました。途中、貴重な植物と発見され、写真で記録し、株は保存することにしました。

川の生きものを調べてみよう
（平成7年8月20日、38名参加）

水のほとんど流れていない渇水の音為川でおこないました。それでも、サワガニ、ヒラタドロムシ、カワニナ、ヘビトンボなどが多く観察でき、水質判定では、かろうじて「きれいな水」でした。

ツチアケビ（平成7年8月28日）



玖老勢の鈴木昌久さんの案内で、みごとなツチアケビの群生を見ることができました。
もう数年来同じ場所に発生しているそうで、毎年増えつづけ、今年は25株にとなったということです。
腐生の菌糸に寄生するラン科の植物で、果実がウインナーソーセージにそっくりです。こんな群生ははじめてです。

トビの保護と放鳥
（平成7年8月14日）

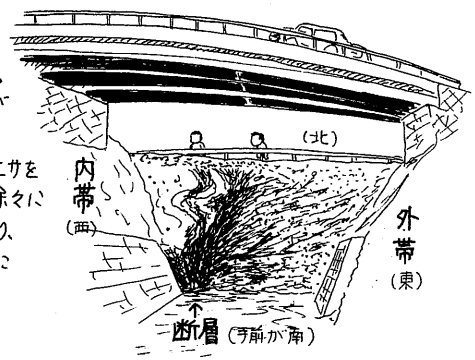
8月4日、弱りきって動けなくなったトビが持ち込まれました。口ばしから血がでていますが、他に外傷はないようです。
とても大きいのでおそるおそるの介護です。
11日放鳥を試みましたが体力がなく失敗。
次に無理やりおし込んでやのみこむよう体力をつけて再度挑戦。
今度は大空へ飛び立っていきました。

口にエサを3と除々になり、14日に

東三河の岩石と鉱物
（平成7年8月6日、50名参加）

武田信玄の金山跡、白鳥山の水晶（津具村）と東栄町粟代のセリサイト鉱山を訪れました。
水晶や黄鉄鉱の採集ができ、宝物がひとつふえた気分です。

中央構造線の断層現わる



長篠地内の河川工事（大井川）の現場にみごとな断層の露頭がでています。生きた教材です。

はくぶつかんだより No.34 1995.8

鳳来寺山自然科学博物館

秋の話題

熱心な見学
（平成7年10月26日）

鳳来中部小学校4年生のみなさん（48名、足木由香子、村田典子教諭）が鳳来寺山登山と自然学習のため、博物館を見学しました。"はくぶつかんたんけんクイズ"や登山マップを使ったテキストで真剣な見学でした。登山では、館内の展示が役に立ったのではないかと思います。

手づくり「きのこ展」
（平成7年10月6日）

夏の高温と乾燥で野生きのこは今までにない不作でしたが、博物館友の会の竹之内昭夫・栄、野口明義、本多隆、墨岡成治・しずヨ・徹郎、岡本光生、小椋克好のみなさんのおかげで、きのこの採集から展示までてつだっていただき「きのこ展」を予定どおり開催できました。豊田、豊橋方面からかけつけて、早朝から夕方までつきあってくださいました。恒例となった「きのこ展」ですが、今年は特に好評でした。みんなの協力でできた初めての展示会で、とてもよい体験でした。友の会のみなさんにはじより感謝します。「きのこを学ぶ」会は87名の参加でした。

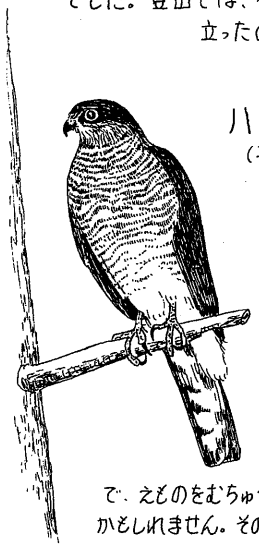
おめでとう、やったね！
（平成7年11月5日）

博物館友の会員の阿部有希ちゃん（羽根井小6年）の夏の自由研究「水の中の幼虫たち」が豊橋総合動植物公園のコンクールでみごと金賞にえらばれました。参加24校、234作品中の上位8人のひとりです。
「川の生きものを学ぶ」学習会がヒントになったそうです。
自分のことのようにうれしくなりました。

「秋の紅葉を楽しむ」会
（平成7年11月11日、66名参加）

今年は県民の森へ場所を移しての開催でした。観察コースにあったヌルデの実を井波一雄先生にすすめられて、みんなでなめてみました。何と塩からいのです。成分は$(C_4H_5O_2)_2Ca$（酸性林檎酸カルシウム）だそうです。自然観察は五感をつかわないとわからないことがいっぱいです。

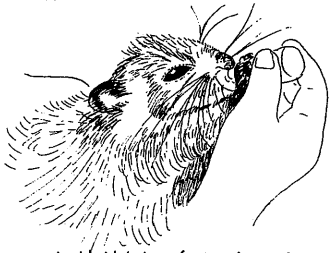
ハイタカ
（平成7年9月7日）



鳳来寺山パークウエイ門谷入口付近で飛べずにいたタカのなかまが保護され、運ばれてきました。発見した小林雄一（大野）さんによると車にぶつかったのでは…ということでした。
小型のタカ類でキジバトくらいの大きさです。小鳥をエサにしているので、えものをむちゅうになって追っていての事故かもしれません。その後回復したので山へ飛び去っていきました。

かわいい見学者
（平成7年11月21日）

地元の鳳来保育園（西野美子園長）のみなさんが来てくれました。
とても行ぎよく、しっかりと見学した後は、ベランダで楽しい昼食。
これから大きくなって何回も足をはこんでほしいと思います。未来の博士のたまごたち。



ムササビのあかちゃん
（平成7年9月11日）

観光客が佐久間方面の道路でうずくまっていたムササビをつれてきました。巣の場所とわからずもどしてやれないため、館で世話をすることにしました。スポイトを哺乳ビンがわりにミルクを与えると、両手でしっかりとつかみ無心に飲む姿はとてもかわいらしかったのですが、2週間後に容態が急変し、死んでしまいました。幼い命を助けられなかった無力さと野生動物のむつかしさを体験。教訓になりました。

秋を味わう交流会
（平成7年10月15日）

農産物直売所「荷互奈（ニゴナ）」主催の「わくわく体験交流会」が町内の塩瀬でおこなわれ、博物館で、きのこ採集と見分け方講習に協力しました。きのこの発生はとても少なかったですが、地元で珍重されるコウタケが見つかり、ニュースになりました。
昼食は、きのこごはんと"里美ちゃんなべ"で交流。みなさん満足そうでした。

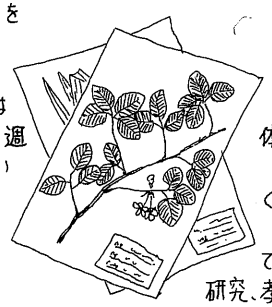
ミニきのこ展
（平成7年10月18日）

友の会会長の小椋さんは県の新城事務所につとめています。仕事もいっしょうけんめいですが、きのこの勉強もいっしょうけんめいで、ついにお役所のロビーで「きのこ展」を開催し、話題になりました。
県民サービスと事務所のおかたいムードの改善に役立ち好評でした。

わたしたちの博物館
（平成7年11月20日）

海老小1、2年生の20名のみなさんが、（山本校長先生と鈴木章悦、本多三恵教諭）見学にみえました。
コノハズクとブッポウソウのちがいがよくわかったと思います。自分たちのふるさとの自然を学ぶ博物館、みんなに利用されやすい環境づくりに努力していきます。

博物館の仕事を体験
（平成7年10月9日）



体験学習で鳳来中学2年の熊谷志保さんと橋本太郎くんが館の仕事を手伝ってくれました。内容は腊（サクラ）葉標本の手入です。
博物館は窓口で券を売るのが仕事ではありません。資料の収集・保存、調査・研究、教育普及活動が重要な柱です。
その一端を理解してもらえたと思います。

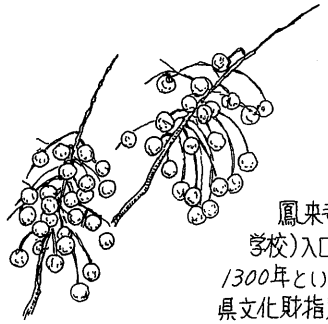
はくぶつかんだより No.35 1995.11
鳳来寺山自然科学博物館

氷と雪の冬でした

バードウォッチング（平成7年12月9日）

この日は希望者が多く、2回に分けておこないました。はじめは、午前8時から町立鳳来寺小学校（高橋校長）の生徒と保護者65名。校内の愛鳥の丘を出発し、海老川まで観察に出かけました。飛ぶ宝石といわれるカワセミにも出会い感激。10時からは博物館で39名で実施。早朝とちがい、ほとんど野鳥の姿が見えません。しかし、上空を見上げるとハヤブサが1羽、雄々しく飛んでいる姿を発見。ふだん見られない姿に、みんな首の痛みも忘れて観察しました。

ムクロジの実（平成8年2月）



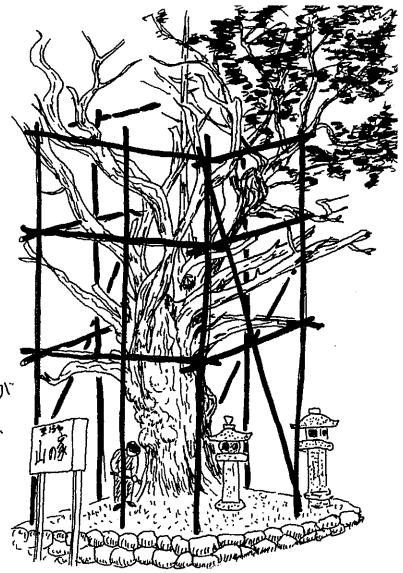
昨年は例年になくムクロジの実がたくさんつきました。

ナンテンやセンダンの実が食べつくされた今も、野鳥は食べにきません。

果皮は大量のサポニンを含み、石ケンの代用になり、洗たくや洗髪にも使えます。

種子は黒くかたいので羽子板の羽子の玉に使われました。

ネズの樹 大手術（平成8年2月13日～2月23日）



鳳来寺山麓の東海市山の家（旧門谷小学校）入口に、目通3.52m、推定樹令1300年といわれるネズ（昭和30年7月1日、県文化財指定）があり、延命手術が樹木医さんによっておこなわれました。

枯枝が取り除かれ、昔の姿はとどめませんが門谷部落の歴史をつぶさに見てきた老木は、さらに年輪をきざむことになりました。

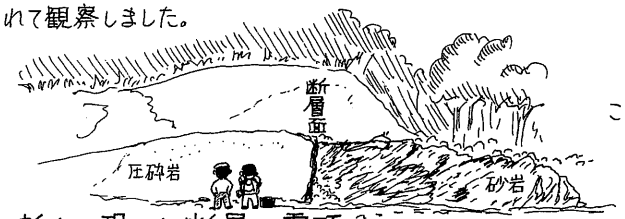
博物館学術委員会（平成7年12月17日）

この博物館の学術面を支えていただく組織が学術委員会です。動・植物・地学・総務部門に分かれ、各分野で活躍されている先生方で構成されています。この会議では主に平成8年度の学習会、特別展、改修構想などについて話しあわれました。間もなく、みなさんのところへ、新年度行事計画がお知らせできます。

冬の鳳来寺山自然探検（平成8年2月10日、60名参加）

毎年人気のある冬の自然探検。今回は板敷川（宇連川）沿いのコース鳳来峡でおこないました。湯谷温泉駅から上流に向けて植原駅までの植物観察です。とても寒かったので、休憩場所で用意した豚汁は体の芯まで暖まり、最高でした。なかにはドンブリ3ばいもおかわりした人もいます。

又、道沿いにケンポナシがあり、昔の味をなつかしむ人、初めて味わう人など、ちょと得した気分の1日でした。



新たに現れた断層の露頭（平成7年11月～12月）

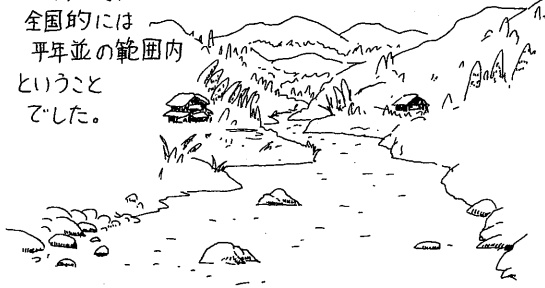
鳳来町長篠の町立中部小学校北の農地構造改善工事の現場に断層が現れました。断層の破砕帯は巾が30cmもあり、何度も断層運動がくりかえされたようです。学術委員の菅谷先生と調査し、記録を残すことにしました。

（館報25号）

きびしい寒さ!?（平成8年2月3日）

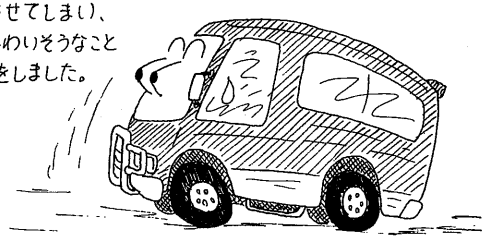
今シーズンの寒さはひときわでした。豊川本流の寒狭川が全面凍結しました。その日の最低気温は−7.8℃。流れも凍ってしまうほどです。又、1月30日は積雪10cmと…。今までにない、寒い冬と思っていたら、気象庁の発表によるとこの10年ほどが暖冬だったため特に寒く感じたそうで全国的には平年並の範囲内ということでした。

（朝日新聞朝刊3月1日付）



ああ　びっくりした（平成7年12月24日、7時30分）

通勤途中、鳳来町只持地内の路上で、イノシシ親子に遭遇！お互いびっくり、親子は凍りそうな川を泳いで対岸へ逃げました。冷たい思いをさせてしまい、かわいそうなことをしました。

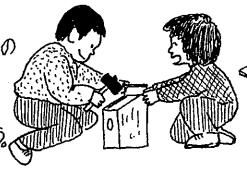


巣箱とエサ台作り講習会（平成7年12月16日）

町立鳳来寺小学校のふるさと学級で巣箱とエサ台作りが企画され、博物館も協力しました。作り方や、その後の管理などの要領を説明したあと、全校生で作業開始。親子でペアをつくっての挑戦です。

初めてノコギリを使った子供や、おかあさんもいたようです。あっという間に時間がすぎて、有意義な講習会だったと思います。

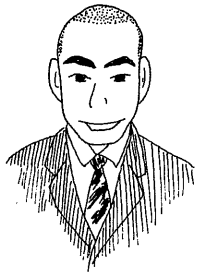
しばらくして庭先や、近くの木にエサ台、巣箱がかけられていました。次は巣立ちまでしっかり観察してくれるでしょう。



鳳来寺山自然科学博物館

はくぶつかんだより No.36 1996.2

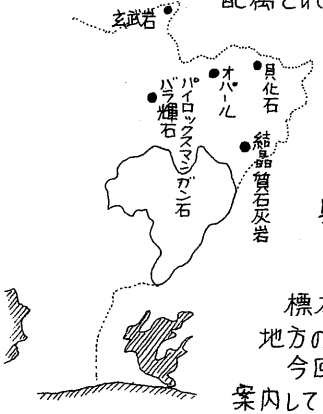
新緑から深緑の季節へ



博物館の新しい風（平成8年4月1日）

新年度の人事で博物館に新館長が誕生しました。前学術委員で医王寺住職でもある横山良哲（ジョウテツ）館長です。さらに、藤原浩子さんにかわって酒向千歳さんが配属されました。今後友の会の事務局もやってもらいます。

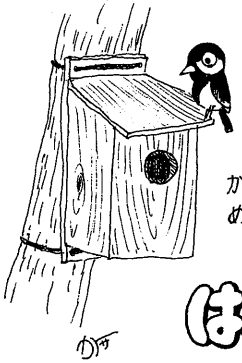
若い新館長のもとでスタッフ一同、はりきって活動をはじめました。



奥三河のお宝ハンティング（平成8年6月13日）

標本用岩石の採集をしながら、奥三河地方の岩石・鉱物の産地めぐりをしました。今回は、そのほんの一部ですが館長に案内してもらいました。大理石やマンガン鉱山跡は、宝さがしの気分でワクワクしてしまいました。

巣箱に野鳥が入ったよ（平成8年5月13日）



昨年の12月16日、鳳来寺小ふるさと学級で作った巣箱から、ヒナが巣立ちました。自分で作った巣箱が野鳥の保護に役立ったことを、自分の目で確かめることができて、とてもよい体験でした。

新聞（東愛知）でも紹介されうれしい話題になりました。

日本一の大断層 中央構造線を学ぶ（平成8年6月8日、54名）

総延長1,000kmにもおよぶ中央構造線がわたしたちの町を分断するようにとおっています。今回の地学学習会では、新城市から鳳来町で見られる中央構造線の露頭を観察して、大地のダイナミックな動きと、成り立ちを学びました。

まいごのフクロウちゃん（平成8年5月17日）

下山村の路上でひろわれたフクロウのヒナが持ち込まれました。全身が白い羽毛でおおわれていて、まだ飛べる状態ではありません。近くに巣も見つけられず、農家の人が保護していたものです。巣立ちまで博物館で飼養することにしました。6月末には放鳥する予定です。

ツツピー ツツピー

テッペンカケタカ

チョビ チョビ グイー

鳳来寺山の生きものを学ぶ（平成8年5月25日、97名）

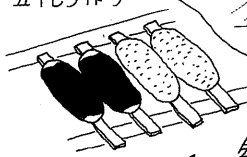
鳳来寺山の北側、槙原林道をコースにしておこないました。槙原川はきれいすぎて水生生物は少なかったですが、ふだん人が入らないところでもあり、野鳥は18種が確認されました。ただし、姿はなかなか見れないので、鳴き声での調査になりました。

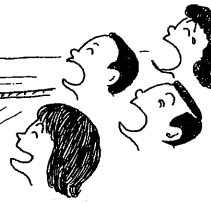
第2回友の会総会（平成8年5月12日）

- 平成7年度会員表彰
- 平成7年度活動報告
- 平成8年度活動計画
- 役員改選

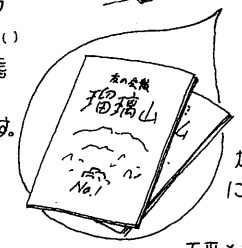
○特別講演
当館学術委員
井波一雄先生

○懇親会
五平もち作り





大好評だった講演会

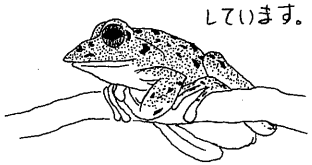


博物館友の会（小椋克好会長）の第2回総会が開催されました。今回は、会報「瑠璃山」も創刊され、特別講演では、平成8年度「植物地理・分類学会」賞を受賞（6月1日）された井波一雄先生のお話を聞くことができました。内容は、次の会報No.2に掲載予定です（お楽しみに）。

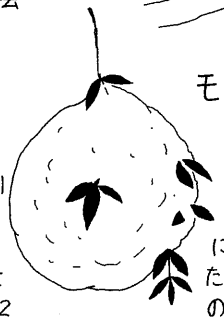
懇親会では、昨年にひきつづき五平もち作り、焼きたてのあつあつをおなかいっぱいいただきました。

ありがとうございました（平成8年5月31日）

庄田とよ（67）さんは、昭和47年4月から当博物館に勤めて以来、25年と2ヶ月にわたり、人知れず陰で館を支えてくれた大功労者です。館にとって冬のような時代も、もくもくと仕事をされ、なくてはならない存在でした。草とりから、そうじ、文書の清書、片づけ、標本づくりまで、何でもたのめるお母さんでした。なかでも腊葉標本作りは、みごとです。標本ラベルに採集者と標本作成者の欄があれば、当館の腊葉標本の多くは庄田さんの名が書かれるはずです。この5月末日で退職となりましたが、今までの功労は職員一同決して忘れません。心より感謝しています。



モリアオガエル産卵（平成8年5月31日）



5月の少雨と寒さはモリアオガエルの産卵にも大きな影響を与えたようです。今年最初の産卵は5月31日で、例年より2週間、昨年より11日遅れでした。博物館で記録をつけはじめてから（昭和50年）もっとも遅い記録になりました。

うれしい利用者

今年度も町内の小学生（山吉田小3年生、鳳来東小4・5年生、鳳来寺小2・3年生）が博物館を訪れてくれました。郷土の自然のことなら何でも対応できる博物館を目指して、子供たちの期待にそえるよう努力していかなければなりません。

ほくぶつかんだより No.37 1996.6

鳳来寺山自然科学博物館

はくぶつかんだより No.38 1996.7

コノハズクの話題

コノハズク来鳳

（1996年6月5日）

早川敏雄さんとコノハズク

今年5月初旬、名古屋市昭和区広見町の早川鳥獣店に、紙袋に入れられた息たえだえのコノハズクが持ち込まれました。

とどけた方の車庫に落ちていたとのことでした。

店主の早川さんは、死んだようになったコノハズクをフウゴに入れ、ストーブで温め、水とヘボの幼虫を与え、体力の回復を待ちました。少し動けるようになるとイナゴやミルオームを食べさせて、徐々に元気をとりもどし、一命をとりとめることができました。

その早川さんから当館にコノハズクを引きとってほしいとの連絡が入り、さっそくかけつけました。"まだ完全に回復していないこと、1ヶ月近く人の手でエサを与えたので野性を失っていること、仏法僧の山の博物館で飼育する方がこの鳥の為になる"等考慮して判断されたそうです。

現在、博物館の保護室でリハビリ中です。

仏法僧（ぶっぽうそう）を聞いた!!

（コノハズクの鳴き声、各地で確認）

鳳来町仏坂峠

- 5月19日 20:00～20:30
  古田和男さん（町議会議長）
- 5月20日 20:50～21:00
  加藤貞亨（博物館職員）
- 6月1日 20:00～20:10、21:00～21:30
  2日 19:40～20:15
  4日 19:50～20:05
  小椋克好さん（博物館友の会会長）
  山本光昭さん（東三河野鳥同好会会員）
  山形則男さん（同会長）

鳳来町池場

- 5月20日 20:30
  伊藤春二、満、峰子、お孫さん家族
  山本きみ子さん他大正琴グループ
- 7月初旬
  金田夏代子、山本秀二郎
  平賀清市、輝子さん等池場の方たち

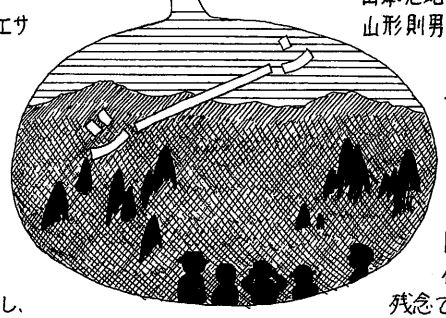
設楽町岩古谷山

- 5月17日 19:00 → 1週間
- 5月27日
  豊田照雄さん（夕津美屋旅館）
  原田猪津雄先生（当館学術委員）
  松尾義吉さん（録音成功）
- 5月30日 19:00
  NHK豊橋支局（録音成功）

設楽町神田

- 7月5日 3:00
  氏原さだえさん
  （神田在住）

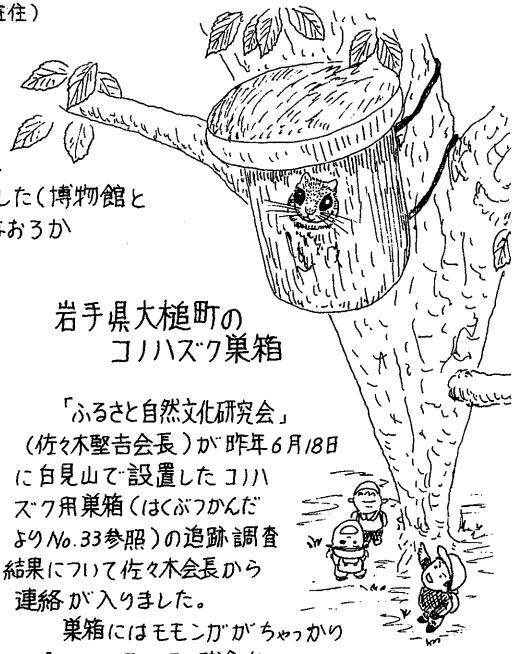
コノハズクに関する情報ありましたら博物館まで、お知らせください



鳳来寺山では……

（1996年5月16・17日）

第1日目は宿坊、2日目は安城農林演習林宿舎で鳴き声調査をおこないました（博物館と門谷21世紀委員会）。両日ともコノハズクはおろか他の生き物の声もほとんど聞こえず残念でした。さらに根気よく、長期に継続していきたいと思います。



コノハズクの巣箱作成と設置

（1996年5月15日）

門谷21世紀委員会のみなさんと博物館が協力し、鳳来寺山へコノハズクがもどれる環境づくりの第一歩として巣箱を掛けることにしました。

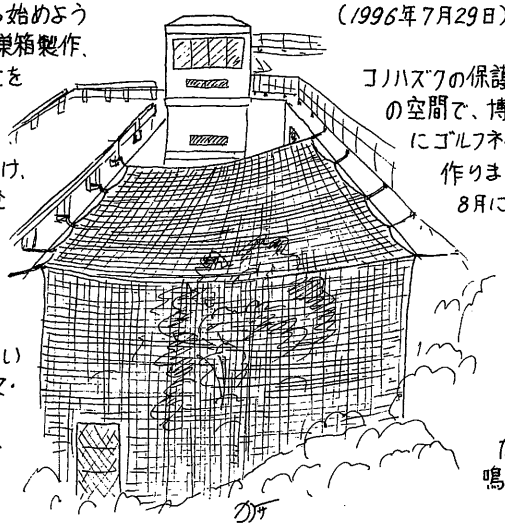
まず自分たちでできることから始めようと意見がまとまり、午前中巣箱製作、そして、午後、馬ノ背岩付近を中心に5ヶ所に設置しました。

巣箱にはすべて番号をつけ、細かく記録し、追跡調査がおこなえるようにしてあります。これからの調査が今から楽しみです。

この活動のもようがNHKテレビ「見たい会いたい山里にブッポーソーを求めて・愛知・鳳来町 旅人 臂美恵」でくわしく紹介されました。（6月1日放送）

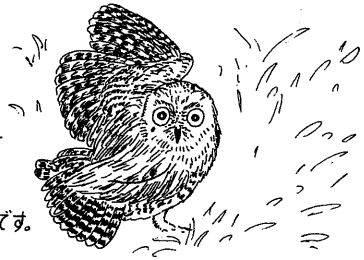
コノハウス完成

（1996年7月29日）



コノハズクの保護、観察用の空間で、博物館の中庭にゴルフネットを利用して作りました。

8月に放鳥の予定です。



作手村のコノハズク

博物館事務室にコノハズクの写真が掛けてあります。これは1993年9月21日、作手村清岳で伊藤健司（同村在住）さんが、ぐう然撮影したもので、正体がわからず、つい最近、博物館をたずねて来られて明らかになったものです。鳴き声だけでなく姿が確認された例です。

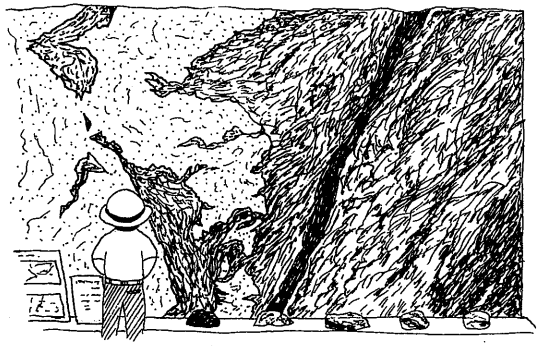
岩手県大槌町のコノハズク巣箱

「ふるさと自然文化研究会」（佐々木堅吉会長）が昨年6月18日に白見山で設置したコノハズク用巣箱（はくぶつかんだより No.33参照）の追跡調査結果について佐々木会長から連絡が入りました。

巣箱にはモモンガがちゃっかり入りこんでいて、残念ながらコノハズクのものにはなっていなかったようです。

岩手での"オット鳥を聞く会"では、今年は声を聞けなかったようですが、隣の村でもコノハズクの声を聞く会を開催し、地域での関心が高まってきたそうです。

夏の話題



中央構造線露頭のレプリカ
（6月30日）

昨年、鳳来町向林で新たな中央構造線の露頭が現れました。工事でけずりとられて消失するところでしたが県の補助を受けて、複製（レプリカ）にして残すことができるようになりました。

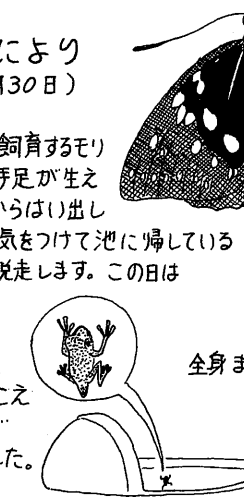
FRP製ですが、現場で直接型取りしたものなので本物の露頭のとおりです。

中央構造線をはさんで全く異なった岩石がとなりあっている様子や、激しかった断層運動の一端をうかがい知る貴重な資料です。

この博物館の目玉になる大切な宝がひとつ増えました。

中央構造線については特別展でもわかりやすく解説しており、あわせて観ると、よく理解できます。

無事でなにより
（7月30日）



博物館で飼育するモリアオガエルは手足が生えそろうと水槽からはい出してきます。毎日気をつけて池に帰しているのですが、時に脱走します。この日はトイレで見つかりました。

開館中、悲鳴は聞こえなかったのでホッとしました。

オオムラサキだ!!
（7月4日）

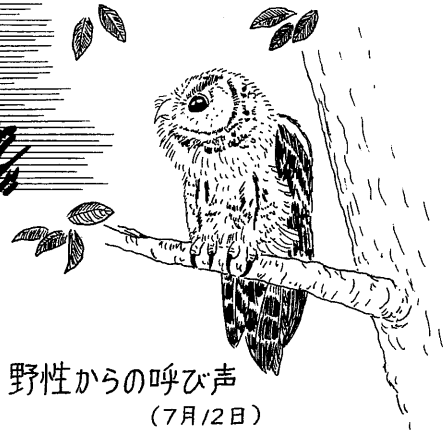
博物館の前庭に突然やってきました。羽の音がバサバサと聞えるほどです。博物館のエノキと関連あるのかナ？

ホタル群舞
（7月18日）

鳳来町只持の水田に20時頃出かけたら、思いがけなくヒメボタルの光の歓迎に会いました。

あぜ道から水田一面にあわい光の点滅が舞ったり、降りたり、信じられないような美しい光景でした。

野性からの呼び声
（7月12日）



5月17日から保護をはじめたフクロウのヒナは順調に成長して体の大きさはおとなと変わらないほどになりました。

6月末を放鳥の目標にしていたので、試みに6月14日に放してみました。

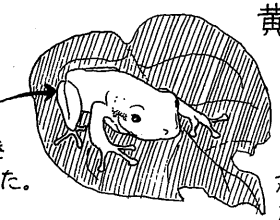
しかし、はばたくのですが、3mほどしか飛べませんでした。それでも半月ほどで翼もさらに立派になったので、7月4日、放鳥を決行しました。

ところが、とう充分飛べるはずなのに館のまわりから離れようとしません。

その間、見学者の人気の的でした。

館員もつい愛しくなって、別れがたく思いはじめた頃、巣箱には帰らず、きびしい自然の中へ旅立っていきました。

黄色のカエル
（6月30日）

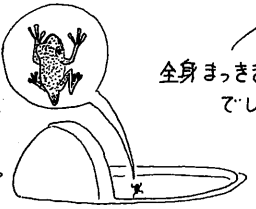


全身まっきき

町内の玖老勢でカタツムリをさがしていた丸山裕貴くん（3才）が見つけました。

保護色かと思い、違う色の上で観察しましたが、変化はありませんでした。アマガエルは体色変化の名手ですが、まっ黄色のものは初めてです。生きた虫を与えるとよく食べましたが、8月4日に死んでしまいました。

あんなところに…
（6月29日）

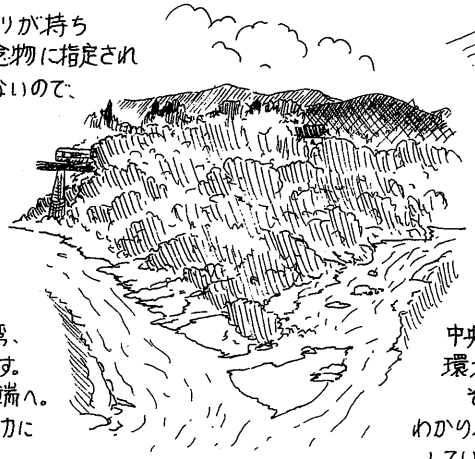


佐久間町浦川からオオミズナギドリが持ち込まれました。場所によっては天然記念物に指定されている海鳥です。館では保護できないので、豊橋動植物公園に行くことになりました。

伊良湖岬の地形と地質を学ぶ
（8月4日、54名参加）

最初の観察場所は蔵王（ザオウ）山でした。三河湾、太平洋、渥美半島の雄大な景色が一望できます。ここで地形と地質のあらましを頭に入れて岬の先端へ。

日出の石門や、燈台付近は硬いチャートが波の力によってけずり取られて、砂浜とは対照的な感じでした。スクールバスの中では、あらかじめ菅谷先生がひろっておいたチャートの円礫に、さらにみがきをかけて、自分だけの宝石をつくりました。



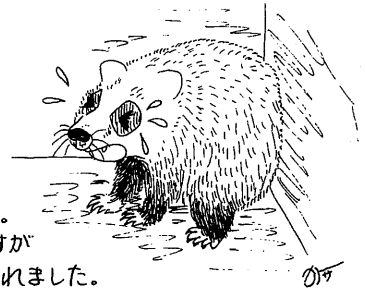
夏の植物を学ぶ
（7月13日、83名参加）

あの長篠城跡を舞台に、おこないました。武田軍の攻撃をしのいだ断崖には、さまざまなシダのなかまがびっしり。また、ホウライシュリ（ヤマユリ）やコウモリカズラなどの貴重な植物を観ることができました。

特別展「話題の動植物と地学」開催
（7月20～8月31日）

新聞やテレビなどでニュースになった動植物や地学の話題をとりあげて展示しています。地学部門では、地震と断層の話題から、ちょうど鳳来町を分断するように通る中央構造線のこと。動植物では、毒グモ騒動のセアカゴケグモやカメムシ、ネコギギ。環境問題でいつもとりあげられるシデコブシ。ナンジャモンジャの木（ヒトツバタゴ）などなど。それぞれ部門ごとで話題の題材について新聞記事や写真、標本などをまじえてわかりやすく展示しています。

ドジなアナグマちゃん
（7月21日）



館の近くの丸山修さん（博物館運営審議会委員、友の会員）宅の水をぬいてある水槽にアナグマの幼獣が入り込み、逃げ出せなくて一晩中さわいでいました。

農家には農作物を食い荒らすきらわれ者ですが丸山さんの温情で、遠くの山の中へ帰されました。

はくぶつかんだより No.39 1996.8

―― 鳳来寺山自然科学博物館 ――

はくぶつかんだより No.40 1996.10

きのこの季節

きのこ展

（10月10日～11月30日）

恒例になった「きのこ展」を今年も開催しています。

今回は適度な雨と気温の条件がそろったため、近ごろにない、野生きのこの豊作の年でした。

展示は解説パネル22枚、きのこの生態写真56枚、乾燥標本6点、の他に町内で採集した本物のきのこを中心にならべられています。

きのこは、カサと柄の部分だけから構成されているため、見分けがむずかしく、じかに触れたり、色やにおいの変化を五感を使って覚えてもらうのがいちばんです。週末には、おおぜいの見学者でにぎわっていますが、きのこの少なくなる11月まで開催予定です。

展示用の標本採集には、友の会のみなさん（小椋さん、竹之内さん、墨岡さん、岡本さん、本多さん、野口さん、石川さん、請井さん、杉本さん）に協力していただき、150種近くの実物をならべることができました。ありがとうございました。

ベニナギナタタケ（シロソウメンタケ科）

きのこを学ぶ会

（10月13日 晴、94名参加）

関西菌類談話会の山田弘先生（当館協力委員）の講師でおこないました。今年で9回目、とても人気のある学習会で参加を断わらなければならないほどです。

午前はきのこの観察と採集。午後は採集品の同定ときのこ展を利用した見分け方の勉強。

この会ではアカヒダササタケ、カンザシタケモドキ、オニフウセンタケなどの珍しいものをはじめ、不明なものを除いて50種が確認されました。

県山岳連盟のきのこ観察会

（10月6日 晴、37名参加）

愛知県山岳連盟（湯浅道男会長）の自然保護活動勉強会の第1回として計画され、当館職員が担当しました。

きのこの自然界のはたらきや、採集の注意などを学んだ後、野外観察。帰りは参道のゴミひろいをしながらの観察でした。きれいなベニナギナタタケなど70種が見られました。

はみだし組のきのこ勉強会

（10月20日 晴、37名参加）

カゴタケ（アカカゴタケ科）

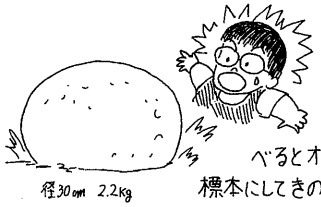
13日に参加できなかった人を中心に開きました。山は少し乾燥していましたが、名前不明のフウセンタケが大量に発生していました。又、4年ぶりに珍しいカゴタケが見つかり、感動しました。

コノハウスの住みごこちはいかがでしょうか

8月8日にコノハウス（はくぶつかんだより No.38参照）に放鳥したコノハズクは、今も元気でリハビリ中です。毎日、自分の体重の半分くらいのエサをたいらげています。館の隣家の日比野さん夫婦は、8月20日未明に博物館の方角から鳴き声も聞いています。その後は確認されていませんが、コノハウス内で虫を捕食するところを一度観察することができました。野生を失わずに回復することを祈っています。

裏の畑にバクダンが…

（9月9日 新城市石田 平井さん宅）



径30cm 2.2kg

朝、家の菜園を見ると、白い大きな球状の物体が見つかりました。もしや毒ガスバクダンかも。出向いて調べるとオニフスベでした。標本にしてきのこ展で展示してあります。

ギャ!! これ食べたの!?

（10月14日）

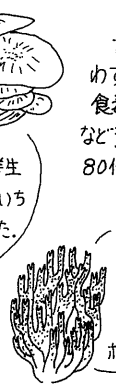
窓口で「これっておいしかったけど何ていうきのこですか」と質問されました。見るとテングタケ科のササクレシロオニタケによく似ています。毒菌にはなっていませんが、まだ不明種で、猛毒菌が多いテングタケ科のきのこですから一歩まちがえれば命とりでした。お吸物にして5.6本食べたそうです。シコシコしておいしかったそうですが、二度とやめてもらいたいものです。ぜったいにまねしないようにしてください!

ハタケシメジ
道ばたに群生
今年は大発生。いちばん相談が多かった。食、美味

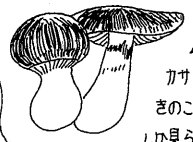
きのこ鑑定団（きのこ相談）ふんとう中

（10月10日～いつでも受付）

博物館では、きのこの季節に入って次々と姿をあらわすさまざまなきのこの相談を窓口で受けています。食毒の確認、名前調べ、食べ方、へんてこな形のものなど連日いろいろなきのこが持ち込まれています。今までに80件以上の相談がありましたが、その一部を紹介します。

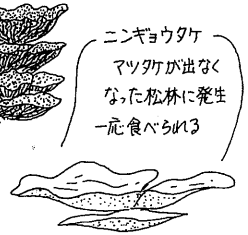


ハナホウキタケ
株元から枝分れしているものは要注意。弱毒がある。ホウキタケとまちがえやすい。



ムレオオフウセンタケ
カサが赤紫色の大型のきのこ。黄柳野方面だけしか見られない珍菌。一級の食菌。ないしょにしておきたいきのこ。

オオムラサキアンズタケ
菌輪をつくって群生する。見つけるとカゴがすぐにいっぱいになる。知っていると得するおいしいきのこ



ニンギョウタケ
マツタケが出なくなった松林に発生
一応食べられる

きのこ情報をあつめてます

鳳来町を中心に、この地域で利用されているきのこの情報を集めています。

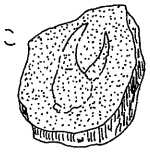
○きのこの呼び名（方言・例カアタケ・ネズミアシ）
○調理方法・味
○中毒体験
○変なきのこ（実物・場所・環境・時期）
その他きのこに関するエピソードや相談などお待ちしています。気軽に博物館へおいでください。

などなど

あのフクロウちゃんかな？（8月12日夜）

門谷地内の真増寺の裏山で、フクロウの鳴き声を聞いた近所の方が連絡してくれました。7月4日に放鳥したフクロウの若鳥がたくましく生きぬき、この谷で生活していてくれると信じたいです。（No.37.39参照）

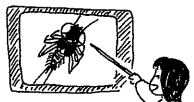
郷土の自然教室（9月19日）



鳳来寺小全校生徒が参加し、海老川の川原でおこなわれました。横山館長の講師で川原の石の観察。上級生はスナムグリの化石をさがしました。足もとの自然を学ぶ有意義な活動でした。

川の生きものを調べてみよう

（8月25日 晴 58名）



音為川で実施しました。採集した水生昆虫は顕微カメラを使ってテレビ画面いっぱいに映しだされ、体の細かな特徴まで鮮明に観察することができました。

鳳来寺山自然科学博物館